



## クリスマスプレゼント

---

サンタさんに一夜限りの恋人をプレゼントされた。

イブはとても幸せな時間で、僕も彼女も笑みに満ちていた。

翌朝、陽光の眩しさに目を覚ますと、

彼女はどこにもいなかった。

手紙もなかった。

プレゼントは「彼女がいると幸せだよ」という無言のメッセージ。

## 依存症の夜

---

いろんなものに依存していた今までの自分。

断ち切ってみた。

寂しさが襲ってきた。

でも新たに見えてくるものもあった。

それは断ち切ったはずの依存。

世の中は依存症に覆われていたのだ。

新しく生まれる絆も依存だけど、いままでとは違うもの。

## 視線の先はひとつだけ

---

あの子、その子、この子、

たくさんの目々がくるりくるりと巡りまわる。

疲れた目をもとの位置に戻しても、

そこはもとの位置じゃなくなった。

そして、

本当に好きな子を探せなくなる。

一点を見ていた頃の自分を取りもどそう。

キラリと光るスピカを探して。

## Photo

---

ふたりに撮った写真。

焼き増しして、僕の方、彼女の方が、世界に2枚ある。

僕の写真は色褪せてきたけど、

彼女の写真はどうなったんだろう？

もう捨てちゃった可能性が高いけど、

心の中にちょっとだけでも焼き付いていてほしいなど、

10年後に思ったよ。

## 蜃気楼

---

すぐそこにいたはずなのに、

ゆらゆらと消えてしまった。

僕が見ていたのは現実のものではなく、

僕の屈折した光が浮かび上がらせた蜃気楼だったのか？

飛行場で彼女が何度も振り返ったけど、

もう振り返らなかったときから、この揺らめきは消えない。

## 東京タワー

---

君と見上げた東京タワー。

いまはいちばん高くはなくなったけど、

あの頃の真赤なタワーのままだよ。

スカイツリーよりも、大切な思い出がつまっている、

僕の東京タワー。

## Good Night

---

満天の星空に。

冬の夜空に。

かわいいチワワに。

いつか僕のとなりで眠っているだろう君に。

おやすみなさい。



## 電話

---

ひとり孤独を感じているときにかかってくる、一本の電話。

人とのつながりを感じる、温かい音がする。

携帯の着信音は、場にそぐわない機械的な音ではあるけれど、

心の波動に調和して、身体中が和み、癒される。

僕はやさしく通話ボタンを押す。

もしもし。

## ハーモニカ

---

海辺にすわりながら吹くハーモニカ。

足下を打つ白波のように、

こだましてさすらう。

波、音楽、青。

海の向こうまで、この声を届けたい。

## 冬の太陽

---

雪になりきれない冷たい雨が降っている。

空は心の不安定さを嘲笑うかのように灰暗い。

人は傷つき、街は静まる。

でも明日は今日のままではない。

冬晴れの太陽が雨雲の陰から、こちらを覗いている。

## 空気のようなもの

---

あたりまえのように思ってたもの。

空気のようにあって当然だと思ってたもの。

なくしてはじめてわかる。

どんなに小さなことでも、

小さくないことでも、

助けられてるんだって、

いつも感謝しなければならないんだ。

パパ

---

きっと良いパパになれるって思ったんだ。

料理しているときのマジメな横顔、みんなが食べているときの嬉しそうな笑顔。

面倒見のよい彼は、みんなを幸せにしてくれる。

ただ帰るときの後姿には寂しさが見え隠れして、僕は心配なんだ。

## お墓参りの夢

---

大学自体の友達で、好きでも何でもなかった。

でも、昨夜その子のお墓参りに行く夢を見た。

起きたときに泣いてたんだ。

この感情はなんだろう？

ただ思い出したのは、その子の笑顔は、とてもかわいかったなってこと。

## 福島のことろ

---

山々の光景が僕の心に迫ってきた。

むかしそこにあった空は、いまでも変わらない水色をしてるけど、

汚染された空になったんだ。

土も水も、むかしのままなのに、

すべて変わってしまったんだ。

ただ人のやさしさだけは、

変わらないままあり続けていた。

## 無敵のおじいちゃん

---

無敵のおじいちゃんだった。

90を前にして幼くなってしまった。

心配性になり、おぼつかない歩き方になり、意味不明に怒鳴るようになった。

でも、入院してるおばあちゃんに会いたいと涙を流したおじいちゃん。

はじめて見るおじいちゃんの涙がすべてを語っていた。



## 上京、帰京

---

この街が僕にくれたもの。

魅力のなさ、つまらなさ、上京への夢。

そしていま、この街が僕にくれようとしているもの。

郷愁、家族への愛、帰郷への夢。

歳を重ねるうちに変わっていく心情と感性。

僕は死にゆく街並を見つめながら、東京行の新幹線乗場に向かった。

## 太陽はまわる

---

ほら、やっぱり晴れた。

たとえ寒かったり、雨がふったりする日があっても、

太陽は僕たちを見捨てたりはしないんだ。

ひとりひとりを温かさで包み込みながら、

太陽はやさしく地球をまわってるんだよ。

## 鍋

---

鍋はみんなで食べると美味しい。

和気あいあいとした団欒が生まれる。

そう、それって、まるで鍋の中の食材のようだ。

それぞれが互いに味を分け与え、不足点を補い合い、

100点を200点にしてしまう。

だから、僕たちはもっと、鍋をつつき合う必要があるんだ。

なう

---

恋をすると女の子は綺麗になる。

オーラ。輝き。きらめき。

恋のために、何かを捨て、何かを得る。

自分のしがらみだった何かを開放したんだ。

一方、僕は何に囚われているのだろう？

過去？ もっと過去？

そんなもん、捨ててしまえ。

いまを開放せよ！